

京都秋期福音特別集会 (1)

唯一のもの

―マタイ伝7章1～12節―

1974年11月17日

小池辰雄

自己義認 キリストと一つの世界 聖霊の世界に棄身 自我という罪 何が福音ですか 不可能を可能にさせるキーポイント 聖霊の愛 十字架の門 豚に真珠 絶対・具体的なるものパウロの神秘 本願の響き 聖霊のバプテスマ 中に一宝あり 本当に生きている 其れ恕か 唯だ一つのもの 祈り

【マタイ7】

1 なんじら人を審く^{さば}な、審かれざらん為なり。 2 己^{おの}がさばく審判^{さば}にて己^{おのれ}もさばかれ、己^{おの}がはかる量^{はか}りにて己^{おの}も量^{はか}らるべし。 3 何ゆえ兄弟の目にある塵^{ちり}を見て、おのが目にある梁木^{うつばり}を認めぬか。 4 視よ、おのが目に梁木のあるに、いかで兄弟の目より塵^{ちり}をとり除かせよと言^い得んや。 5 偽善者よ、まず己^{おの}が目より梁木^{うつばり}をとり除け、さらば明らかに見えて兄弟の目より塵^{ちり}を取りのぞき得ん。

6 聖なる物を犬に与うな。また真珠を豚の前に投ぐな。恐らくは足にて踏みつけ、向き反^{かえ}りて汝^からを噛みやぶらん。

7 求めよ、然らば与えられん。尋ねよ、さらば見出さん。門を叩け、さらば開かれん。 8 すべて求むる者は得、たずぬる者は見だし、門をたたく者は開かるるなり。 9 汝等のうち、誰かその子パンを求めんに石を与え、 10 魚を求めんに蛇^{うづま}を与えんや。 11 然らば、汝^から悪^あしき者ながら、善き賜物^{たまもの}をその子らに与うるを知る。まして天にいます汝^からの父は、求むる者に善き物を賜^{たま}わざらんや。 12 然らば凡て人に為^せられんと思^おうことは、人にも亦その如くせよ。これは律法^{おきて}なり、預言者なり。

●自己義認

今日はマタイ伝7章です。

1 なんじら人を審^{さば}くな、審かれざらん為なり。

人間というのは自己義認^{おのれ}ですね。イエスが出られた頃に、ユダヤ教はパリサイ人^{びと}というのが非常にばばをきかせていた。これは「分かれたる者」という意味で、



「自分たちは特別な宗教的・道徳的な部類の者である」

と言って、自らを義として他を審いていた。見下していた。こういうご連中がはばをきかせていた。それから、神殿宗教、戒律宗教の坊さんたち、祭司。また、教師。モーセの律法を、なかなか七面倒臭い律法をいろいろ詳しく知っているご連中。こういう者たちがはばをきかせているときに、キリストは現れた。マタイ伝23章にあるように、七回、キリストは

「偽善なる学者、パリサイ人よ」

と言って、攻撃しておられます。この「偽善なる学者、パリサイ人」が自己義認して人を審いている。この事態はとんでもないと言って。

また、宗教の世界が歴史においてよくそういった間違った事態をやっている。今でも、アイルランドではカトリックとプロテスタントが政治的な問題とからんで争って、とんでもないテロ事件なんか起きています。カルヴェインの頃も宗教戦争があつた。三十年戦争なんていう、ドイツが荒廃に帰したあの戦争も結局、宗教戦争ですね。およそキリストの福音の精神と違った事態が、キリスト教の歴史において何回か繰り返されている。即ち、宗教が、福音がイデオロギーに化しているわけです。イデオロギッシュな主義主張、

「俺たちの信条は正しいんだ。お前たちのは間違っている。礼拝の仕方がどうだこうだ」

というのが歴史においてしょっちゅう繰り返されている。これは突き詰めて言うと、みんな自己義認の角度の宗教的現象なんです。そういうことはおよそこの福音とは違う。

宗派根性というやつ。政治的には党派根性です。日本の政治界を見ても、お分かりのとおりです。それから、教育界においても政治的なものとゴタゴタになってやっている。日教組だとか、あるいは一部の学生だとか。イデオロギーではどうにもならん。ドイツがイデオロギッシュのなかなか強い民族でもあるものだから――そればかりではないけれども――とうとう東西に分裂してしまつた。

そのことで実は憂いていたのはゲートルです。ゲートルは

「およそ主義を乗り越えなければダメだ。主義では本当の真理はつかめないぞ」と言つた。

内村鑑三先生が「無教会」と言つた。歴史的には大いに意味があるわけです。

「教会が形式化してしまつてダメだ。洗礼も聖餐もみんな形式だ。そんなものは要らん。信仰のみだ」

と。マルチン・ルターもパウロも

「ただ信仰によつてのみだ」

と。それでもう

「信仰、信仰」



と、信仰一点張りというわけです。教会なんてのは要らないと言う。それを「無教会主義」という。

「教会」というのは面白い言葉ですよ。本来、「教会」なんて、どこからそんな訳が出てきたかと思うね。「キルヘ」(独 Kirche)、「チャーチ」(英 church)という。これはギリシア語の「キュリオス」「主」という字からきている。「主に属するもの」という意味なんです。本来は、チャーチとかキルヘというのは素晴らしい言葉です。

「主のもの、主に属するもの」

という意味だから、「教会」なんていう訳がそもそも間違っている。マルチン・ルターの頃にも既に、間違っている現象が来ているものだから、ルターは「キルヘ」という言葉を避けた。キルヘという言葉は本当はよいのだけれども、現実がダメなものだから、それで「ゲマインデ」(Gemeinde)「共同体」と言った。

「キリストの体としての共同体」

という意味で、この「ゲマインデ」という言葉を聖書で使っている。彼は「キルヘ」という言葉を使っていない。そして、ルターは

「幸福」「グリユック」(Glück)

という言葉も使わない。

「ゼーリツヒカイト」(Seligkeit)「祝福されたるもの、恵福」

です。いわゆる幸福主義はダメだから、ルターもそのことにちゃんと着目しているわけです。

自己義認というのが「罪」です。キリストの最大の弟子であるパウロが正にこの自己義認者だった。パリサイ人^{びと}中のパリサイ人であって、そのチャンピオンであった。これがひっくり返されたんですから。

「なんじら人を審^{さば}くな、審かれざらん為なり。2 己^{おの}がさばく審判^{さばみ}にて己^{おのれ}もさ

ばかれ、己がはかる量りにて己も量らるべし。

だから、「人を審いてはいかん」という。

「審かれざらん為なり」

とは、ただ、人に審かれるばかりではない。逆に言えば、もうひとつ奥を言うと、

「神さまに本当に審かれてしまうぞ」

ということ。そういった自己義認は人を審く。

「あれはかつてこうであった」

とか、

「今現在、こうである」

とか、いろいろな批評をする。そんなことをしているうちは、本当の大きな大和の世界に入れない。日本人は本当は、「大和民族^{やまと}」という素晴らしい名前を持っているはずなんだ。どうして、みんなそういうことに気がつかないんですかね。



「そんなものは古臭い言葉だ」

なんて言ってるね。「大和」というのは素晴らしい。福音の本当の世界はこの大和の世界です。近頃は、話し合いの対話ばかりしている。審いているうちは、大和は来ない。

私みたいな破れ器はさんざん審かれてきた。今でも、私を審いている人があるでしょう。いいですよ、何でも。私はキリストに本当に愛されています。このようなやつでも神さまは使ってください。

●キリストと一つの世界

昨夜は話しているうちに12時半を超えてしまったね。それから寝て、私は今朝6時前に目が醒めた。お隣でも寝てらっしゃるから、あまり電気をつけたらわるいから、それで祈って1時間、ちょうど7時まで祈ってしまった。ところが、祈っているうちに大変なことになった。霊動が起きまして、地震かと思ってみんな驚いたらしい。

私は沈黙の祈りをして、祈りの世界でまっ先に十字架を瞑想する。十字架を瞑想して、キリストの十字架の下に平伏すと、今度はエライことになってくる。御霊が臨んでくる。そして、本当にキリストと一つの世界になる。もう、私は本当は叫びたかった。けれども、あそこで叫んだら、みんなびっくりしてしまうから、そこはこらえた。しかし、ちよつと異言が迸った。これも押さえてしまった。そうしたら今度は、もう身体がどうにもならん。それで身体が霊動状態になってしまった。そういうことなんです。

そういうように、本当にキリストと一つになったら、もうこれは何とも説明ができない。そういうありがたい事態です。およそ思われたりしている世界ではない。私たちの本当の生命を内側から本当に創造してください。もう、このキリストの生命の他に生命はないですよ。

「我は復活なり、生命なり」

と。ああいう言葉は読んだだけで、もうグツと来なくてはならん。

「そうですか、あなたは復活ですか、生命ですか」

なんてやっていたらダメです。キリストが「我は復活なり、生命なり」と仰ったら、直ちにそれを受けとる角度でもって読んでいかなくはいけません。キリストは何も惜しまない。一切を与えようとしているんです。キリストはキリスト自身を与えようとしている。何万人いようが、何億人いようが、キリストの生命は無量無量だから。

お釈迦さんの世界だつてそうじゃないですか。「無量寿無量光」と言うでしょ。「阿弥陀」(アミッター)というのは「無量寿無量光」という素晴らしい言葉です。「南無」というのは、無量寿無量光に帰一(きいつ)することが「南無」なんです。「仏」というのは覚者。だから、「南無阿弥陀仏」というのは本当はキリストのことだよ。

「無量寿無量光であるキリストという驚くべき神の覚者に帰一せん」



というのが「南無阿弥陀仏」ということ。我々は「南無阿弥陀仏」と祈ったつて一向差し支えない。

「なんだ、あれは仏教徒になってしまったか」
なんて。

「そうじゃないよ、仏教も呑んでしまったんだよ」
と。そういうようなわけです。もう、私は説明するのが嫌になってしまふんです、正直。そういうような世界です。

● 聖霊の世界に棄身

自分の小さな義だとか、自分の小さな考えで、相対的な世界にいて、人をどうのこうのと批評するのは、なんと情けないことかと思う。宗教界も。私は全無教会を相手にしたつて、びくともしない。私は無教会の畑に育つたから、内村鑑三、藤井武、塚本虎二なんていう先生方ももちろん尊敬しています。立派な方々です。それぞれの役割を果たしていかれました。けれども、使徒たちの次元からはズレた。本当に聖霊の世界に棄身で受けていこうという気合からはぬけている。

内村鑑三先生という霊的な人物ではありませんけれども、それでもなお、霊的な御霊の器である宣教師が来て話したら、内村先生はそれに感動したという。先生自身にも火花は散つていたけれども、常恒の火まではおそらく……ということでしょう。先生のことを何のかんのと私は言いたくないけれども。

とにかく、そういうことで、

「無教会も前進せよ」

と言うことです。なぜ、十字架のこつち側で踏みとどまって、ただ十字架だけを仰いでいるか。「仰ぐ」のではない。「仰ぎ見る」という言葉をさんざん内村先生は言っていました。それは「仰ぎ見る」も結構でしょう。けれども、本当に十字架の下にぶつ倒れて――先生もぶつ倒れたでしょう――どうしてもつと大胆に言われなかつたか。

先生の『一日一生』の5月31日の項を見ると、御霊の世界の素晴らしい言葉が出ています。けれども、あれが本当に御霊の世界から言われているか。あるいは、「について」言われているか。多少そこに観念化がある。「中から」ものを言わなければダメなんです。福音の中から、キリストの中から告白する。だから、私は

「聖書は教訓ではない、告白である」

と申すわけなんです。

みなさん、聖書を読んだら、大事なひとつの一句をピシヤツとつかまえないければダメです。あとはいいんだ、どうでも。あとは自然にとけてきちやうんだ。それを、

「このつながりはどうなっている。これは果たしてキリストが言っただろうか。文



法的にどうかかっているんだ」

なんてことばっかりやっている。そのうちにくたびれてしまう。そういう読み方をしたら、とんでもない。私は横紙破りみたいなことを言うけれども。「聖書研究会」なんて、研究したって聖書の中に入れてはしません。

●自我という罪

3 何ゆえ兄弟の目にある塵を見て、おのが目にある梁木うつばりを認めぬか。

自分の目に大きな梁木うつばりがある。即ち、自分の大きな罪、自我という「罪」をそつちのけにして、人のことをどうのこうのと、なぜゴタゴタやっていますかと。

4 視よ、おのが目に梁木のあるに、いかで兄弟の目より塵をとり除かせよと

言い得んや。

そんな大それたことが言えるかと。

「おのが目に梁木うつばり」

とは何ですか。さつきから言っている自己義認です。自己義認の、この心根が即ちおのが目の「梁木うつばり」というやつです。この自己義認をはずさなければダメだよと。

「もう俺みたいなのやつはどうにもならん」

と。ルターさんは修道院に入りました。これは救いの道だと思つて。そして、一生懸命でやりました。もう模範僧です。けれども、彼自身はちつとも飲みの世界にこない。何か自分分は苦しい。本当に心の底から喜んで、神の前に立てるか、神の律法を本当に踏んでいるか、行っているかと。どう考えても、そうではない。それで苦しくてもう——これは全く自己義認と反対です、神の審判の前に懼れおののいて、また苦しくて——独房でどうとうぶつ倒れてしまった。あれをもう少しぶつ倒れたままにしておけば死んでしまったと、彼は自分でそう言ってます。けれども、ルターが出てこないから——多分あれは三日三晩だ——他の僧がドアを破って入ったら、彼はまっ青になってぶつ倒れていたという。その真剣勝負を彼はやったわけだ。

どうしても生まれつきの自己弁護者であり、自己義認者であるのが、我々の「罪」というやつです。

「この間違つた行い、この間違つた考え」

それが「罪」ではない。自己を義しいとしていることが、それが実は隠れたる一番根底の罪なんです。神さまを抜きにして——道德の世界ではいいですよ、それは立派ですよ、道德の範疇では——けれども、宗教の次元になると、そいつはダメなんだ。それは落第なんだ。道德の世界で及第は、宗教の世界にいくと落第になってしまう。だから、躓くんですよ。

「どうして悪いか」

なんていうことだね。神抜きの世界は傍若無神という。この頃は傍若無人というやつは随



分けるよ。けれども、もつと悪いのは傍若無神ということ。そういう青年がたくさんいる。傍ら神無きが若しと。もう今の一般の若い人たちは傲慢だね。あれは「傲慢」ということも分からないんだ。そういう感覚もない。電車に坐つて、老人が立つていても、「どうぞ」と言つて席を譲ろうとする感覚もない。気の毒になるね。

●何が福音ですか

5 偽善者よ、まず己が目より梁木をとり除け、さらば明らかに見えて兄弟の目より塵を取りのぞき得ん。

「偽善者よ」と、ここにもちゃんとキリストは言つておられる。偽つて、善からざるものを善しと言つているような、そういった偽善もあるけれども、この場合の「偽善」というのはもつと強い意味なんです。

「なるほど、相対的にはお前のやつていることは義しいよ。けれども、神の前には、それは義しくないんだ」

と。これが偽善なんです。

「偽善者よ、まず己が目より梁木を

自己義認というやつを、自己主張というやつを、主義主張というやつを

とり除け。さらば明らかに見えて兄弟の目より塵を取りのぞき得ん。」

即ち、

「私のない人となれ」

ということですよ。キリストはこういうことを仰るときに、

「さて、それでは、取り除くにはどうするのか」

というようなことは仰らない。それで、

「福音書は困つたな」

という。一番大事なことがとつておきになつていているわけです。それで、なんののかんのと云うわけです。

「己が目より梁木をとり除け」

と言うが、取り除けますか。取り除けるならば、キリストは十字架にかかる必要がなかったんです。キリストは十字架にかからない前に、私たちに不可能なことを全部、水を割らずに言つている。だから、福音書を読んだら、これに及第する人は一人もいないんだ。もう山上の垂訓の初めの言葉からそうです。

「恵福なるかな、霊の貧しき者、天国はそのひとのものなり」

と。

「まあ、この程度なら、いいよ」

なんてことはキリストは言わない。水を割らずに、はつきりともを言うんです。



「それでは、何が福音ですか」

と言いたいくらいです。ところが、「何が福音ですか」と問わないよ、みんなね。何か少しもつたいをつけて、

「少しはこれを守るようになった」

なんて、多少体裁をもつてやっているような。そんなことをしているうちに、福音が福音でなくて、おきて律法になってしまう。

●不可能を可能にさせるキーポイント

キリストが不可能な言葉を言っている、その不可能を可能にさせるキーポイントがちやんとある。それがキリストの十字架です。

「私の言ったり、したりしていることはお前たちには今できない」

と。弟子たちに、ペテロに対して、

「今はダメだ。けれども、私は水を割らずに言っておく。私が十字架にかかって、お前たちのその自己義認の罪を全部背負ってしまうから。十字架で私は背負ってしまうから。帳消しに、御破算にしてやるから。そうしたらば、私心のない、自己のない、その場の中に入れてやる。その場には今度は、実力を与える」

と。これが聖霊です。十字架の後から、神・キリストの霊という聖霊の渦が入ってくる。

「そうしたら、私の言ったり、したりしたことがみんな分かってくる。また、

私よりも大きな業わざをなす」

「お前たちを通して私が業をするよ」

ということですよ。我々は手放してキリスト以上の業なんか絶対にできません。我々を通してキリストはいよいよ、

「世の末までも地の涯までも、万人を通して私は大活躍をするぞ」

ということなんです。イエス・キリスト自らが地の涯までも世の末までも大活躍をする、その手先となれ。手となれ足となれ口となれ、ということですよ。

手となり足となり口となることによつて、キリストの栄光が現れる。聖名を讃美する。それが我々の人生の意味であり、目的である。皆さん一人びとりの人物を通して、キリストはその人でなければできない仕事をなしたもう。顔が違うように、一人びとりは天職を授かっている。それが本当の天職です。天的使命。それを天命てんめいと言ったつていい。天的命令だ。天命という言葉をそういう意味で使ったつて一向差し支えない。それを我々は受けとつていく。

白い菊は白い菊らしく、黄色の菊は黄色の菊らしく、紫の菊は紫の菊らしく、花咲くというわけです。みんながバラだったり、みんなが菊だったり、みんなが桔梗だったら、どうにもならん。いわゆる全体主義というやつはそういう類型的なんだ。



今の若いのが妙な政治的な思想におどってしまったって、とんでもない。本当の自由がなくなる。魂は窒息してしまう。本当の自由を知らないから、ああいうことになる。そして、

「自由だ、自主だ」

とやっている。神さまという無限無量なるものに連なってこそ本当の自由となる。本当の自由はその特殊性を通して絶対的なものが現れる。特殊なるものを通して絶対的なものが現れるという事態が、そのものが本当に自由であるということなんです。その絶対をぬきにして、

「自由、自由」

なんて言ったって、それは不自由でしようがないんだ。もう、喧嘩になってしまっただけ、終いには自分がどうにもならなくなってしまっただけ。これは事実が証明する。

日本の教育は、文部大臣に本当に宗教的な人物が出てこなければダメだよ。

「もうこの辺で、文部省もいかがですか、宗教的なことにも関心をもつたら……」

なんて、私は文部省のお役人がいる所で言ってしまった。本当の真理ならば、なにも恐くない。こういう窒息しそうな事態では、もうやり切れないから。

● 聖霊の愛

「私たちの目から梁木うつぼりを取り除けよ」

というのは、キリストが

「私がお前たちのその梁木を取り除いてやるぞ」

ということなんです。

「偽善なるかなパリサイ人よ」

は我々である。この我々のパリサイ性、人間がもっている生まれつきのパリサイ性は、これをキリストの十字架が取り除いてくださったから、本当に楽になる。ものを本当に認識するようになる。限界がわかる。更にそれを伸ばすことができる。自在なことになる。偽りは偽りとしてわかる。だから、私は世界のおよそインチキでない宗教は、何でも読んで、みんなこれを福音の中に入れてしまっただけ。

いわゆる霊的な人がまたえらく人を審くんだね。聖霊はそういう冷たい霊ではない。本当に十字架を受けとってない霊の世界は危ないですよ、ヘタすると。十字架の贖いのどんだ底の愛がこの聖霊の中にある。聖霊は愛の霊である(ロマ5:5)。

手島郁郎君が『聖霊の愛』という本を書きました。私はその時に、

「これは本当に今欠けているポイントをついた本だ」

とはつきり評価してあげました。無教会はそれを黙っている。卑怯ですよ、真理に対する虚心坦懐なところを持っていないから。やっぱり、無教会主義というものがある。

「手島は少しおかしなやつだ」



なんて。人間としては少しおかしなところがあるかも知れない。いいよ、そんなことは。彼は自分をいつもキリストに投げかけては、乗り越えて進んで行つた。人はそれぞれいろいろな器につくられ、誰だつて欠陥がありますよ。そんなことをとやかく言つて、今の「梁木」の話のとおり、審いていたらどうなるか。神さまが

「この人を使つて、これをさせよう」

と、一人びとりは天下一品につくられている。愛の御霊は、その人における大事なものを見て、そこにおいてキリストの姿が現れていくことを祈つて、お互いに助けて行くことではないですか。

そういうことで、本当に愛をもつて塵を取り除くことができるようになる。

「私の愛を受けろ」

と、こういうようにキリストが言われる。だから、7章の1節から4節は、どこだつてそうですけども、キリストの十字架と聖霊の角度から読んでいけば、全部これが解けてくる。そして全部、力になってくる。不可能が可能になってくる。それが、水が割られたもの言ひ方をしたら、却つてももの足りなくなつてしまう。だから、本当にこれが福音なんです。

●十字架の門

新しい方がいらつしやるから、申し上げますけれども、マタイ伝5章1節の、

「幸いなるかな、心の貧しき者、天国はその人のものなり」

という、あの「心」は「霊」という字です。

「幸いなるかな、霊の貧しき者、天国はその人のものである」

ということ。

「聖霊、聖霊と言いながら、霊が貧しいとはどういうことですか」

と言うかも知れない。我々が賜っている霊がある。パウロの書翰にも書いてある。即ち、人間の一番中心は、「霊」とか「魂」とか言うところだ。「プニユーマ」という字で、「風」とも、「気」とも、「霊」とも言う。これが、さつきから申し上げているとおり、自己義認の角度の霊になっているから、これはヘタするとサタンの虜とりこになる。それで、サタンの虜とりこになって、さんざんサタンに使われている人がたくさんいるわけだ。政治家なんかも随分その方面だね。

だから、「霊が貧しい」ということは本当に神さまの前に平伏すということだ。なかなか平伏ひれふせないんだ、ちよつと平伏すかも知れないけれども。やつぱりこれも及第できないわけだ。

「幸いなるかな、霊の貧しき者」

とは、キリスト自身が霊の貧しいひとであった。

「何も私はできません。私は何も言えません。」



神さまが言えということを書いてるに過ぎません。

神さまがせよという事を神の力でやっているに過ぎません」

と、キリストはヨハネ伝の中でそういうようなことを言っておられる。

「我何事も為し能わず」

神がさせていると。神の前に本当にぶつつぶれた人はキリストなんです。霊が本当に貧しいひとはキリストなんです。これはご自分の告白ですよ。

「そうしたら、天国、即ち神さまが私の中に入ってきました」

というのが、キリストの言葉の本当の奥の意味なんです。奥の内実なんです。

それで、キリストの真似をしようと思ったって、私にはできない。だから、キリストの中に入ろうと言うんです。十字架の門を通って入る。そうすると、

「恵福さいわいなるかな、汝、わが十字架によって霊が本当に貧しく、平伏しの霊にされた者よ。天国即ち聖霊の我が、汝のうちに在り」

と響いてきた。だから、あの言葉が私に化体したら、俄然、あとのキリストの言葉が楽に読めるようになった。これは鍵ですよ。天国の鍵はただこの一言にある。私は正直、畳の上で平伏してしまった。

「十字架と聖霊のキリストがああ言の中に含まれていた」

ということに気がついたわけです。どの註解書にもそんなことは書いてない。

人を審さばくなんて、くだらないことはもうなくなってしまうわけです。福音の真理に反することをやっている、自分がダメになるから、わかるんです。

●豚に真珠

6 聖なる物を犬に与うな。また真珠を豚の前に投ぐな。

「福音は素晴らしい」

と言ってね、これを誰でも彼でも、

「さあ、いらつしやい、いらつしやい」

なんてやってはダメですよ。噛みつくやつがいるから。そういう

「噛みつくような犬だとか豚がいるからね」

ということなんです。ユダヤ人は、犬と豚は不潔な動物としてけなしている。犬はある意味において非常に忠実な動物として、また尊重される面がありますけれども。ユダヤ人はその角度から、

「聖なる物を犬に与えるな。また真珠を豚の前に投げるな」

と言う。即ち、「聖なるもの」とか「真珠」というのは福音のことです。

「福音の安売りをするな」

ということですよ。苦しんでいる人、悩める人、求める人ではなくて、福音に逆らっ



て神をけなすようことを言っているやつは、ほつとけばいい。そのうちに行き詰まったら、電柱にでも頭をぶつけたら、やつて来るから。道を説くにはやはり順序がある。

恐らくは足にて踏みつけ、向き反りて汝ら^{かえ}を嘔みやぶらん。

話していて、聖霊の事態に、福音に逆らっている人がいると、なにか妙な波動が感じられる。ここには今いませんけれども。講演会なんかやると、

「ああ、あつちの角度に妙なのがいるな」

なんて感ぜられることがある。

7 求めよ、然らば与えられん。尋ねよ、さらば見出さん。門を叩け、さら

ば開かれん。

これは有名な言葉だね。けれども、大学の先生でも、

「あれは一体どこにあるんですか？」

なんてやっている。聖書を読んでない。ヨーロッパの文化を受けとるために、また東洋の文化を受けとるために、聖書や仏典を繙^{ひもと}かなかつたら、これは本当に片手落ちなはなしです。片手どころじゃない。法律学であろうと、経済学であろうと、いわんや哲学や文学にいたつたら、聖書抜きには考えられない。マルクスだつてそうですよ。彼の終末論的な角度のものは、聖書からきたものがちゃんとある。ただ、マルクスはある一つの点を非常に間違えましたけれども。

●絶対・具体的なるもの

。すべて求むる者は得、たずぬる者は見だし、門をたたく者は開かるるなり。

キリストの言というのは非常に面白い。「何を求めよ」と書いてない。やっぱり、宗教の世界は禅問答式なところがあるね。もちろん、

「キリストを求めろ」

ことです。

「私を求めなさい。そうしたらば、与えられるよ」

「私を求めろ。そうしたら、私そのものを上げるよ」

ということ。全的に与えられる。

「全的に求めろ。ケチな求め方をするな」

と。今は、普通は何でも「要求、要求」で、相対的な財の世界の要求ばかりだ。待遇問題ばかりです。

キリストを――永遠の生命、天国、何と言ってもいい――それを求めれば、その絶対的なものは必ず与えられる。相対的なものはダメだ。絶対的な具体的なものを求める。絶対・具体的なるものとはキリストのことです。神さまを求めても、これは困るんだよ、神さまというの。これは見えないし、空漠としていて、ヒゲのお爺さんを思い出しても、これ



はしようがない。キリストが「父よ」と言ったから、

「どんなお父さんだろうか？」

なんてね、そうじゃないですよ。人間という相対的な存在は絶対的なものを表現するのに、或る具体的な表現でなければ言えないから、全存在的に信賴するものを「父」とキリストは言われている。あるいは、「母」と言ったって悪くはない。その表現をとおして何にぶつかっているかということ。言い換えると、福音の世界は神話的な表現です。

だから、「エントミュトロギーリング」(脱神話)なんてことが始まるわけです。また、仏教の方々はかなり哲学的な面がありますから、

「父なんて、そういった対象的なのはちよつと、キリスト教はまだ低次元だ」

なんて思う。仏教では「宇宙の大霊」とか、「梵^{ぼん}」だとか言う。

ところが、そういった非常に具体的な言い方をしながら、この相対的な人間をその絶対の具体の中に入れる、その媒介としての表現なんですから、間違えないようにしてください。

超現実の本当の根源現実の神というのを我々の具体の世界に、絶対なるものを相対界に顕した。相対と絶対の全く合一したものである存在がイエス・キリストであります。これが「受肉」の事態です。キリストという私たちと同じように涙を流し、笑い、ご飯も食べ、水を飲み、眠るといふ、このイエスという人間の弱さをそのまま持つてらっしゃる方が、その弱さの中に、もの凄い強さをもっている。人性の中に本当に神性を宿しているところの神人合一、というのがキリストのことです。この神人合一なる実体、イエス・キリスト、これが私たちの救い主なんだから、贖い主なんだから。

「キリストを求めよ」

の他にどこに神を求めることができるのか。

「神は何処に」

といつかお話しした。その「神は何処に」はキリストに現れた。だから「求めよ」というのは、

「我(キリスト)を求めよ」

です。だから、皆さん、何と言ったって、マタイ・マルコ・ルカ・ヨハネの福音書でキリストにぶつからなくては。

「福音書は一体何を教えているのでしょうか？」

なんて、ダメだよそれでは、いつまでたつても。「教えている」のではない。

「私を捕まえろ。私に捕まえられよ」

ということですよ。

「私の方で実は求めているのではないか、お前は早く来ればいいのにと。だから、私に来れば、すぐ捕まえてやるよ。私を求めよ。さらば、私自身を与えてやるよ」ということです。



●パウロの神秘

7……尋ねよ、さすれば見出さん。

「真理は何であるかと、いろいろ尋ねても、私自身が真理の具体的表現である。真理そのものの生きた実体である。だから、真理を求める者は――具体的人間は觀念では生きないよ――具体的な人間は、具体的な私を通し私にぶつかってこそ、初めて『ああ、これが本ものだ』と言って見いだす」

ということ。

7……門を叩け、さらば開かれん。

十字架という門です。これは手でノックしたってダメですよ、身体でノックしなければ。全身でもってこれに、十字架にぶつかる。そして、ぶつ倒れる。十字架という門を叩いたならば、開かれる。

「実は、もう開かれていた」

と言いたいところですよ。

「お前を本当に全部受けとるよ」

と。パウロのガラテヤ書2章20節に、

「我キリストと偕ともに十字架につけられたり。最早もはやわれ生くるにあらず、キリスト我が内うちに在りて生くるなり。今われ肉体に在りて生くるは、我を愛して我がために己が身を捨て給いし神の子を信するに由りて生くるなり」

とある。

「我、キリストと共に十字架せられたり」

と。十字架の所にパウロが行ったら、キリストと一緒に十字架されてしまった。

「もう私は生きていない。今生きている。だけど、私ではない」

と、パウロは言っている。

「キリストわが内に在りて生き給うなり」

とは何ですか。キリストがパウロの中に生きたら、他の人はどうしてくれるんですか。キリストは一人しかいないんだから。もちろん、御霊のキリストのことです。あるいは、キリストの御霊のことです。パウロは

「キリストわが内に」

と言う時に、そんな厳密なもの言わない。

「實在のキリストが御霊のキリストと一つになって私の中に入ってくださいました」

と、そういうような神秘的な事態です。これを

「パウロの神秘」

と言う。



「キリストわが内に在りて生きたもうなり」

とは即ち、十字架と聖霊がはつきりそこで一つになっているわけです。十字架と聖霊は分けることができない。

●本願の響き

あなた方はいろいろな問題があつて、行き詰まつて、祈りの世界で涙が流れるでしょう。それはいいですよ——よくはないけれどもね——必ずその後、現実はそのままでありながら、現実を乗り越え、現実をそこから荷つてしまうところの勝利がくる。これが来なかつたなら、要するに運命環境をしょつちゅう変えて、

「ああ、良くなりました。また、悪くなりました」

と、空の雲と同じだ。これは死にいたるまでどうにもならん。我々の人生というのは、涙の谷、悩みの谷で、これは絶えつこない。それが良くなつて、一喜一憂したつてどうにもならん。もうひとつ奥の世界に入らなくては。ジェット機で雲の上に出て成層圏に入ると、雲海が下になる。悩みと苦しみの雲はみんな下にあるけれど、上に行くと、まっ青の空に太陽が照っている。ジェット機に乗ると、そういうことがすぐに分かる。

「ああ、なるほど、これは相対界を絶した飛び方をしているなあ。私の魂もこのようにして飛んでいこう」

というようなわけだ。キリストの聖霊の翼に乗つたかると、現実の雲の去来するところを乗り越えてしまう。ジェット機に乗っている人は本当にそういうことを瞑想しているかな。

皆さん、少しそういう突き抜けた人になりましょうよ。何がどうなつてもいいよ。そういうところに入ると、今度は逆に、運命環境をこちらが変えていくことができるんです。それはもうキリストの力が及んでいくから。私はこの福音を二十代位で受けとつた今の青年はうらやましくしてしようがない。私は二十代のときには無教会主義はたちの中に閉じこもつていたから、本当は窮屈でしょうがなかったんだ。やつと50歳位から気がついたんだけど。これからは私の本当の生涯だと思つている。まだ、20、30年は生きなければダメです。或る仕事を終えるまでは死ぬわけにはいかん。

そういうわけで、

「尋ねよ、門を叩け」

というのは、キリストを尋ね叩けば、キリストという門が開かれて、その先は聖霊の世界ですから、キリストの霊が与えられる。このマタイ伝7章7節は要するに私たちに、

「私はお前を求めているぞ、お前を尋ねているぞ、お前の心の門を叩いているぞ」

と、逆にその本願の響きが来ているんです。この本願の響きを受けとるのが、この「求めよ」であり、「尋ねよ」であり、「叩けよ」である。我々の側から、「求め」ばつかり、「尋ね」ばつかり、「叩く」ばつかりであつたら、くたびれてしまう。道端で転んだ子供が「アーン」



と泣く。泣く前に、お母さんは子供がどこにいるだろうかとちゃんと見ている。声を発するや否や、お母さんは跳んでくる。子供が走るよりか、お母さんの方が先だ。

あのルカ伝15章の「放蕩息子」だつてそうでしょうが。お父さんは窓辺からいつも

「次男坊はいつ帰つて来るかなあ」

と思つて見ていた。姿が向こうに現れた。放蕩息子がボロを着て、あれは一体、次男坊かと思われような姿で帰つて来た。

「あれはわが子なるや何なるや」

というわけで、お父さんは野原に走つて行つた。そして抱きしめた。

レンブラントは門の前で放蕩息子を抱いているような絵を描いたけれども、あれはレンブラントは本当の意味が分かつてない。野原でもつて抱かなくてはいかん。惜しいね、彼みたいな大画家が本当の精神を捕まえていないから。御霊の世界で見ると、相手がレンブラントであろうと、ああ惜しいなあと思うんです。ミケランジェロもお髯の神さまを描いてしまったからいかん。あれは光だけでたくさんです。

8 すべて求むる者は得、たずぬる者は見だし、門をたたく者は開かるるなり。

キリストは、

「こういう場合には開くが、こういう場合には開かない」

なんて条件的なことを仰らない。いつも、全的に断言的にものを言っている。ということは、「全的な断言的な受け方をしなさい、求め方をしなさい」

ということがこの言外に響いているわけです。それを頭のいい人はすぐ分析する。福音に對しては本当は頭が悪い。大愚は大賢であるのに、小賢であるものだからダメなんだ。

● 聖霊のバプテスマ

9 汝等のうち、誰かその子パンを求めんに石を与え、¹⁰ 魚を求めんに蛇を与えんや。

というのは、ユダヤでは石ころがパンみたいな、バターロールみたいな形をしている。魚と蛇はちよつと似ているから。

11 然らば、汝ら^あ悪しき者ながら、善き賜物^{たまもの}をその子らに与うるを知る。まし

て天にいます汝らの父は、求むる者に善き物を賜わ^{たま}ざらんや。

「悪しき者」とは「罪びと」ということです。この

「善き物」

はルカ伝11章では

「聖霊」

と書いてある。要するに、

「求め、尋ね、叩く」



そのただ一つのもものはキリストであると同時に、キリストをもうひとつ具体的にしたものが聖霊なんです。キリストの具体的なものは――「もの」と言ったついでにいわゆる物質ではないけれども――これが聖霊です。だから、

「聖霊を賜わらんとや。聖霊は必ずやるぞ」

と。どうしても、クリスチャンはこの聖霊を求めなければダメです。聖霊のバプテスマを受けられないことにはダメなんです。無教会が

「洗礼は形式的である」

と言う。そんな形式的な洗礼をしていたらダメだ。けれども、人のことを言う必要はない。では、無教会は本当に聖霊のバプテスマを受けているかというと、ダメではないですか。聖霊について語ったり、研究したりはしますよ。それではいつまでたつてもダメです。本当に聖霊の中からものを言っているかどうかということとは、もう私は読めば分かるんです。

「御霊とはどんなものですか？」

なんて聞く。そうじゃないですよ。本当に祈りの世界でもってこの十字架にぶつつぶされてごらんなさい。そして、キリストと一つになる世界に自分を投げ入れてごらんなさい。何か知らんが、キリストが

「御霊は風の如く、何処より来て何処へ行くかを知らざるごとく」

と言うように、聖霊は私たちの中にはたらく。具体的なことを申し上げれば、私なんかも、祈っていて手を合わせていると、手が離れなくなってしまう。ビリーツと霊撃されるから、全身が痺れてしまうようなことに、ぶつ倒れてしまうようなことになる。特別集会の祈りのときには、よく私が按手すると、そういった倒れるような人が出てきます。

八溝山やみぞという深山幽谷に弘法大師が開いたお寺がある。ある夏、その寺の空いている部屋を借りて、私は三日三晩断食して祈った。そして、霊の世界に深く入ってから、山を下りて来て、療養所でお話したら、皆が私に

「もう、前とは違う。何か非常に霊気を感じる」

と言うんだな。私が話して祈っているうちに、聞いているひとが叫んだり、ぶつ倒れてしまう。妙な霊に憑かれている人に按手して、

「キリストの聖名によって命ずる。出よ！」

と言うと、悪い霊が出ていってしまう。狐の霊に憑かれているのは、こんな（胸の前に両手をたれ下げる）恰好をしてしまうから、あれは妙なものだね。蛇の霊に憑かれたのは、ペロペロと舌を出したりね。邪霊というのがいろいろあるから。私はそんな霊的な人物ではないけれども、キリストの中に本当に入ると、聖名によって不思議なことができるわけです。こんな話はあまりしたくないけれども。

御霊の世界は、私たちをして日常生活においていわゆる道德以上の世界を、本当に喜びをもつて律法を満たすところの自由な世界です。「自由」ということは本当の法則の中に



乗っかっていることが「自由」です。靈法の中に乗っているのが「自由」ということです。鳥が風に乗って自由自在に飛んでいるでしょ。あれは勝手に飛んでいるのではない。ちゃんと物理法則に従っている。物理法則に従わなかったら、鳥だって落ちてしまう。そういう法則に従って飛んでいるのは何とまあ自由なことか。僕はもし人間でなかったら、鳥になりたいね、正直。鳥はいいなあと思う。

●中に一宝あり

求めるものは唯だ一つ。「唯だ一つのもの」と今日、私が書いたのは、この聖霊のことなんです。聖霊は何ものとも代えることができない。

碧巖録の中にもいろいろ言葉があるから、ちよつとご紹介しておこう。

「雲門、衆に示して云く、乾坤の内、宇宙の間、中に一宝あり、形山に秘在す。灯笼を拈じて仏殿の裏に向い、三門をもって灯笼上来たす」(碧巖録第六十二則)

雲門という坊さんが衆に示して云く。乾坤の中――「乾坤」とは天地のこと――天地の中、宇宙の間に、中に一宝あって――その中に一つの宝があって――形山に秘在す。「形山」とは肉体、身体のことです。

これは「五蘊」(物質・精神すべての存在を形成している五つの要素)と言ひまして、

「色(物質・肉体)、受(感覚)、想(想像)、行(意志)、識(認識)」

という五つの人間の働きがある。それを「五蘊」と言ひますが、それを組成するところの存在、それが肉体であるという。

その「形山の中に秘在す」と言ひますから、我々の身体の中に、存在の中に秘かに存在している。隠れている。そこに一つの宝があると。

灯笼を拈じて――灯笼というのは燈火です、

「目は即ち身体の燈火である」

と言う――燈火を捻って、仏殿にかざして、仏殿のうちに向かって、三門をもって――「三門」というのは一つの大門と二つの側門があつて三門という――灯笼の上に来たらせよ。仏殿に向かつて、それを持っていつて、今度は

「三門をもって灯笼の上に来たらせよ」

とは実に妙なことを言っている。

自分の中にある光、灯笼、燈火の籠、即ちカンテラです。カンテラの上に仏殿の三門をただけという。三門を通って行くのに、カンテラの上に三門を持てと。カンテラみたいな小さなものの上に三門をかつぎ上げてしまえと。三門を灯笼の上にかつぎ上げてしまえという意味なんです。

こんなことは現実に不可能なことですよ。では、何を言おうとしているかというところ、この宇宙の中にあるところの驚くべき靈がこの「一宝」なんです。一つの宝なんです。この



宝は靈的な宝で、お前たちの中にもあると。宇宙に遍在しながら同時に我々の中に秘在しているところの、この靈に気がつけと。この靈は即ち「灯籠」なんだと。燈火なんだ。この靈的な燈火でもって、仏殿の三門までもかつき上げてしまえと。三門までも上に来たらせるような、そういった力あるものであるぞという。

だから、もう仏殿にもこだわらないで、仏殿も自由自在になるような、仏殿を支配するような、そういった靈的な事態であるぞという、驚くべき熾んな言葉です。そういう、自分の中にあるところの「仏性」が——或は「真如の靈」「法性」と言ってもいい——それが我々の中にある。

我々の福音の角度から言うと、この「一宝」は即ち聖靈のことになる。聖靈はわが内なる宝です。

「この土の器に宝をもっている」

と、パウロがコリント後書4章7節で言っている。

「⁷我等この宝を土の器に有てり、これ優れて大なる能力の我等より出でずして神より出づることの顕れんためなり」

とある。我々はこの宝を我々の土の器の如きものの中に、身体の中に持っている。形山の中に持っている。この宝はキリストの靈です。この優れたる大なる能力で、この靈で、この靈なる燈火で、三門をかつき上げてしまえ。

「この火燃えたらんには何をか要せん」

とキリストが言われた靈火、燈火です。即ち、その靈をそなえているところの心眼がこの燈火でありますから。

「⁸われら四方より患難を受くれども窮せず、為ん方つくれども希望を失わず、⁹責めらるれども棄てられず、倒さるれども亡びず、¹⁰常にイエスの死を我らの身に負う。これイエスの生命の我らの身にあらわれん為なり。」(コリント後書4・8～10)

イエスの十字架を我らの身に負うて、イエスの復活の生命の我らの身にあらわれん為なりということ。十字架と復活と聖靈は切り離すことができないということです。そういう意味において、碧巖録のこの言葉はおもしろいなと思ったから、皆さんにちよつとご紹介したわけです。

● 本当に生きている

¹²然らば凡て人に為られんと思うことは、人にも亦その如くせよ。これは律法なり、預言者なり。

「律法なり、預言者なり」というのは、「旧約聖書全体だよ」ということです。旧約聖書のことをユダヤ人は「律法・預言者及び諸書」と言う。「トーラー・ネビーム・ウー・ケスビーム」



と言う。その「ウー・ケスビーム」「及び諸書」というのを取ってしまった、「律法と預言者」と言うときには――「預言書」ではなくて「預言者」と言う――旧約聖書のこと、「私たちの経典だよ」ということです。

「**経典を煮詰めれば、凡て人に為られんと思うことは人にも亦その如くせよ**」
 ということ。人間は

「こうしてもらいたい、ああしてもらいたい」

と思うだろうが、そのようにしてやらなくてはダメだと。ということは要するに、「愛せよ」ということ。これは

「**己の如く人を愛せよ**」

という言葉と同じです。

「己を愛することは人間の本能であるが、即ち人を愛することが本能となれよ」

ということ。これは己を愛することを、その本能をキリストは手放しで肯定しているのではないですよ。

「**己を憎まずば、我が弟子となることはできない**」

という。

「その本能をひっくり返して人を愛するということに、本当に生きているということとが自覚されるぞ」

と。いわゆるマイホーム主義なんていうのはちっとも本当に生きてはいない。

私は結婚式のときによく、

「あなた方が本当に幸せであるとは、あなた方の家庭に人が喜んでやってきて、人を本当に喜ばせる、そういう家庭であることが自ずから幸福なのであって、幸福を求めるところには幸福はない。幸福は、本当の生き方をするところに自ずから結果するものであって、求められるべきものではない」

ということを申し上げます。

● 其れ恕か

孔子の弟子の子貢が孔子に尋ねた。

「子貢問うて曰わく、一言にして以て終身これを行なすべき者ありや。子の曰わく、其

れ恕か。己の欲せざる所、人に施す勿かれ。」(論語 卷第八 衛霊公第十五)

「恕」とは思い遣りです。

「キリストは深く人を思い遣る人である」

とへブル書に書いてある。あの思い遣りの心が即ち、人のいろいろな内側を本当に共感し、共苦する、苦しみを共にする。その思い遣りの心が、今度は実力を持たなければダメです、ただ思い遣るばかりでは。



「己の欲せざることを人に施すなかれ」と孔子の方は言っている。

「己の欲することを人に施せ」

と言ったのがキリストです。孔子の言葉では、「己の欲せざるところを人に施すことなかれ」という消極的な表現になっているけれども。

「それ恕か」と。あるいは、恕を「仁」と言っているところもある。あるいは、「愛」と言っているところもある。あるいは、「忠恕」という言葉もある。

「子の曰わく、賜や、女、予れを以て多く学びてこれを識る者と為すか。対えて曰わく、

然り、非なるか。曰わく、非なり。予れは「一以てこれを貫く。」(論語 卷第八 衛霊公 第十五)

孔子は

「私はたくさんのことを学んで、識っている者だと思うか」

と子貢に尋ねた。子貢は

「そうです。違いますか」

「いやそうじゃないよ。私は生涯ただ一つのことを貫いたただけだと答えた。その「唯だ一つのもの」とは、仁とか恕ということですよ。

「私の教えも実践もただこれを中心にして動いていた」

ということですよ。「一以てこれを貫く」の「一」とは何かと、また子貢の弟子が子貢に聞いたときに、

「それ忠恕か」

と答えた。「忠」とは「まこと」、「恕」とは「思い遣り」です。真心をつくして人のために思い遣ってやること、これは「仁」と言ってもいい。

●唯だ一つのもの

ただ残念なことには、孔子の世界では、

「では、本当の実力がどこから来るか」

ということがはつきり言えないわけです。その実力は聖霊なんです。キリストは

「この御霊を受けとつたら何でもできるぞ」

と仰った。

「我によらずば、何ごとも為し能わず」

と言う。ということよ、

「我によれば、何でもできるぞ」

ということ。何でもできる」とは、神さまのように万能になるということではない。

「私を受けとれば、お前が願っていることは必ずやってやるぞ」



と。我々は相対的存在なくせに何でもかんでもと、そんなことを思うことはないわけです。質的に――量的ではない――100%のことができるようになる。それはキリストの霊を受けたときに、そうなってくる。

そうしたならば、皆さん、生活が楽しくてしょうがない。いいですよ、躓いても転んでも。とにかく一番本質的なことを受けとっていけば。一番大事な、唯だ一つのを抜きにしては、その他にもう文化文明を本当に健全にする道はない。偉大な芸術家もみな、そういうところ、魂が火花を散らしていた。また、偉大な事業をする人も本当の仕事をする。何をやるにしたって、やることは何でもいい。そこに本当に神の栄光が現れる。神の国がその人を通して現れている。どんなに世界がひっくり返っても、神の国はひっくり返らない。それだけの自信をもって私たちはこの生涯をわたって行かざるを得ない。それでなければ空しい。

「空くうの空なるかな。すべて空くうなり」

になつてしまふ。

● 祈り

祈ります。今より二千年前、ナザレより立ち上がられ、

「預言者はその故里ふるさとに容れられず」

と、ガリラヤの湖畔を自在にお歩きになり、天地の間を即ち神殿となし、ただ主なる御神さまに己を全托し、

「我れ何者にもあらず」

と、父なる御神さまの御力を、御言を賜り、自在に神を証しておられたところの私たちの贖い主キリストさま。今もなお、二千年いつも同じく霊界に在り給いまして、自在に御霊をもつて私たちに臨んでくださる主さま。

「この唯だ一つのもの、聖霊を受けよ。私は十字架に懸かって、お前たちの自己義認の、目の梁木を全部取り除いた。私心をすっかりなくした者にした。今どうであらうと、相対的現実を心配するな。根源の現実はお前たちにやってある。そこに無条件に私を受けなさい」

と。パウロはあなたに逆らっていたパリサイ人でありましたが、しかし、ダマスコ途上で

「サウロ、サウロ、なんぞ我を迫害するか」

と、彼は復活のキリストにぶつ倒され、アナニヤの按手によって心眼が開かれ、

「わが眼より鱗の如きもの落ちたり」

と、彼は新しくされました。本当に聖霊の器にされました。ヨハネもペテロもヤコブもみんなその通りでありました。かくして、本当にキリスト道の歴史は始まりました。

この使徒たちの信仰、この現実、今私たちもまたあざかりたいです。どうぞ、この使徒



行伝的な現実を、また新しく私たちの現実として、使徒行伝の続きをいよいよなさしめたまわんことを願ひ奉ります。この紛糾しているところの、混沌たるところの、また精神的に亡びに向かつているところの、この世界をいかんせん。しかしながら、恐れません。神の国は必ず成る。私たちはその一環を承つて進んで参ります。

私たちの人間的な信仰とか決心ではどうにもなりません。ただあなたの生命にパウロの「我れキリストのうちに、キリストわがうちに」

と同じ事態をいよいよ日々^に私たちの現実となし、あなたを食らい、あなたを飲み、聖書を食らい、そして本当にその中に私たちを投入して行きます。

「求めよ、さらば与えられん。尋ねよ、さらば見いださん。門を叩け、されば開かれん」

とは、与えられるものは聖霊でありました。

あなたの御本願に加持されて、私たちは進んで行きます。あなたの霊が加わり、あなたの霊が保たれることを加持と申します。空海が密儀宗教を展開しましたが、それは仏教の世界で、本当の事態を彼はまた空海らしく展開したのでした。その他のいろいろな第一流の坊さんは仏界でもって、その通りの現実を生きました。私たちはこの20世紀において、この歴史的な伝統をもつところの京都において、キリストの霊がいよいよ新しくここに輝き、ここにあるところの兄弟姉妹たちを通して、第二の宗教改革が自ずから成つていくことができますように切に願ひ奉る。

これは聖霊なくしては成りません。聖霊のあるところには必ず、どのようになりましても、決して負けず、一人びとりはいろいろな患難を荷なっています。絶対に亡びません。絶対に退きません。なんとなれば、あなたがそのような驚くべき力の神、愛の神、担いの神でありたもうが故であります。感謝いたします。

主イエス・キリスト、わが一切でありたもう。我らの一切でありたもう。私たちはあなたの身体であり、あなたに連なっている者であります。感謝いたします。どうぞ、ここにあるところの兄弟姉妹はどんな患難にあつても、絶対にへこたれず、パウロと共に

「この宝をわが内に有つ。これ大なる能力の我より出でずして、汝において現れんがためなり」

と言つて進んで参ります。感謝いたします。どうぞ、この一人びとりの具体的な祈りを、神さま、本当にああなたの根源の事態から、満たしてくださるように、支えてくださるように、また、突破してくださるように、切に願ひ奉ります。

今、心からの感謝と讚美と希望、兄弟姉妹たちのそれと共に聖名により捧げ奉る。アーメン。

